

西

合三拾五番

東

合五拾壹番

差引

拾六番 東勝

外ニ四番 勝負無

西

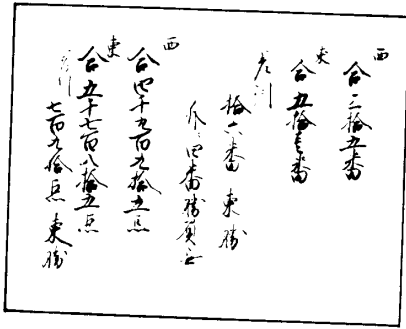
合四千九百九拾五点

東

合五千七百八拾五点

差引

七百九拾点 東勝



点揚

四百五拾点

百弍十

百三十

弍百

弍百

四百拾点

七十

百四十

五

四百八点

弍百三

弍百

弍百

三百五拾点

百四十

十

百七十

百六十

六十

百四十

三百五拾五点

百七十

弍十五

以下略ス

清書堂
蚩子

一甫

丑
八月日

一笑雅丈

(注) 54・(ウ)の、西・東に付した(一)内

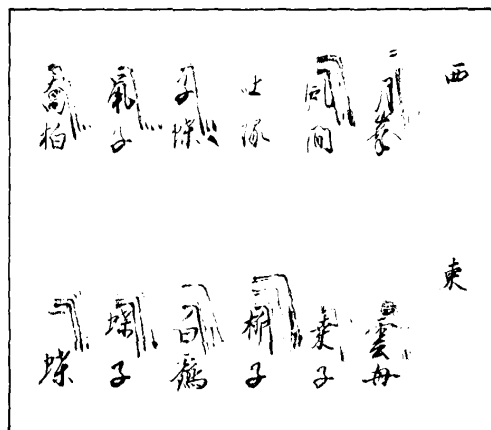
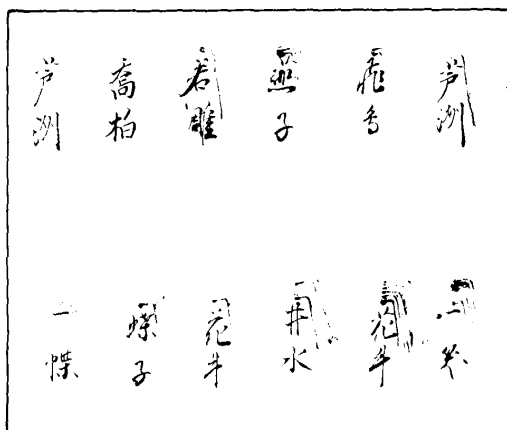
の地名は便宜上私に付けたものである。また、54(ウ)・55(オ)の人名に付いて
いる勾点は省略した。写真で御覧いた
だきたい。

[illegible]

(55・才)

(ウ)

(54・才)



F BA	日和の走る船の足	○ 一	部屋にあうんの預子	柳風	文字足らず哉	全	(49・オ)
K	道烈除る宗違ひ	一	玄孫も引寺参り	全	姉より先に妻さだめ	全	
K	いくつ飛やら空の	飛鳥	目玉は智恵の渡し守	全	伊王が書たる仮名手本	全	
O	旦那交りの花戻り	飛鳥	親に似ぬ子の竹林シ	端月	此方無事と初筆から	全	
V JA	治世の八嶋よ鯨舟	花牛	鶯の子の舞早苗取	全	手引連し惚た同士	全	
U JA	笹の上こく蜚舟	飛	仁義無礼もいわし舟	全	太郎次郎も日吉丸	全	柳虎
K	雀起たり明からず	花	花を抱込む蜜の桶	全	往来を遊ぶ渡し守	全	
O	大名光る御登城日	飛	貴賤わからず友からず	全	約束もなきほととぎす	全	
Z	狐手を引く諏訪の橋	花	酒の金平市戻り	雲歩	心を配る武者修行	全	梅月
F BA	船の早かこさくら鯛	燕子	小町僧正うたかるた	全	曇りなき夜や月の舟	全	(50・オ)
E	舞台の花や姉妹	井水	咄し上手の落し下手	全	降ルを雪見の響音	全	
M	何れをあやめかきつばた	燕	姉より咲し妹背山	月峯	風射掛ル矢橋舟	全	
Z	蹈分て見る花の山	井	わわにも過しくらべ馬	全	乃坎	全	
C	三輪の松とも賀のあわひ	燕	読兼候	全	吾妻下りの美儂おわり	全	一笑
GB	御機嫌燈す蜚の火	井	鳥井木に付村子共	全	野狐の火の手や蜚谷	全	
H BA	酔ふた返しの假名違ひ	若雕	浪花に舟の時津風	全	鶉蹈出す荒畠	全	
D BA	雨に三笠の月戻り	花牛	下手助言や暮の渡	全	袖になり付曲輪の梅	全	
L	野狐の白浪龍田川	喬柏	青野を走る免し馬	全	孫彦烈て桜かり	全	
P JA	門に寺子の又太郎	蝶子	田舎葵者や朧月	全	水の出花よ龍田川	全	米子
Z	師の門に飛明からず	芦洲	美濃から先に札はしめ	南山	名所を拾ふ歌かるた	全	
V JA	鶉飼は出たり月の入	一蝶	乗て公家の御所車	全	使の耳か底抜て	全	

T JA	虫の音も雨の蓋する料紙箱	二蝶 (ウ)	C	雅子 ^(推) の親の異見ハ灸やき	全 (31・オ)	H BA	勘当ハ誰か身の上の文字違ひ	全 (ウ)
E	立留り聞ケハきのふの籠抜鳥	柳風	C	楽しみに思た関が大々まけ	全	C	ぬり直せ土壁のしめりの二日酔	全
E	矢に近ふ鳴ケは狝師や切火縄	全	E	村々の雀あつまる鳳の声	全	OE	酒の野狐はなれ座敷の二日酔	立葉
O	刈萱ハ同じ芽立の穂ながらも	全	X JA	幾年も猫も啼なぬ年始	全	M	口水の垂るとも梅のかくし帯	全
D BA	宗論にお釈迦出たり南無あミた	月 (29・オ)	Z	神前の神楽終て御立跡	全 (ウ)	E	夢の橋軒の渡る牛の時	全 (34・オ)
K	さゝめけと驚の一声薮小鳥	全	G BA	玉の緒を結ぶ ^(マ) 他人の烏帽子親	柳虎	T JA	寺雀鷹の羽音の風薫る	軒月
E	大声の間伏に近き種子ヶ嶋	全	O	外ハやミ内ハ赤穂の小挑灯	全	L	差合の咄し腰折枝の音	全
V JA	反故焼キの反魂香や間夫の文	全	* K	よしあしの浮艸包む隣 ^ス	全	杖敷		
F BA	和尚には告な頭の割茶碗	全 (ウ)	D BA	酔とれや門に羽抑ッ驚の声	梅月 (32・オ)	M	折られたる其花もりもかのへ申	全
Q BA	返事来ぬ内か心の花曇り	雲歩	E	鄙人の国くせ笑ふ都鳥り	全	E	門叩人の木ぬ間に鶏の汁	芦洲 (ウ)
G BA	御抱守同じ褥の添枕	全	G BA	高慢の鼻も天狗の高軒き	全	Z	今日暮に助言の科ハ酒五盃	全
L	世を辞て徒然く艸や柴の庵	全	Z	壁に耳有りて襖の奥床し	全	E	小事言ふ孫に案山子の紙具足	全
E	虫聞や哥の趣向も朧月	月峯	I	鳴つれし蟬を踏しく雨の足	全 (ウ)	C	酒の狐女房か水の御雇用	全
	虫聞ハ秋朧月ハ春敷		E	初夢や猿に音なし富士に鷹	一笑	O	其夜半ハ壁に香を留裏の梅	花牛 (35・オ)
C	誓たる医師に阿漕やかくし酒	全 (30・オ)	V JA	脇目には生る瀬も有り暮の渡り	全	O	壘を見るよふな座禅の生如来	全
W JA	畏守の鴨の羽音や月の出端	全	U JA	待宵の闇ハあやなし蘭の梅	全	F BA	一口の鷹の声聞寺雀	一甫
E	月蔭を袖の時斗や花紅葉	全		人待宵敷		K	仕合の夜を吉日の抜参り	全
O	禁盃の夜はほのくと明石灘	全 (ウ)	H BA	哥の席に胸の霞の晴やらし	全 (33・オ)	O	夜を込て鳥の空音を松の雨	飛入 (ウ)
E	漕出す舟の子とも須广の浦	全	O	菊人形庭の熟柿に履の跡	米子	L	和哥の座に初音をつくる時鳥	松風
E	名月も無筆の闇やいすか鳥	全	C	碁相手に大根売も牛の時	全	I	日外やの頭より解しまとの雪	全 (36・オ)
C	さわくと立込市に殿通り	甫山	K	面影を隣の盗む身の螢	全		比敷	

C	差合の浪に岩ほのかとたらす	宇風	E	師の留主に出たる将基 <small>(基)</small> の忍ひ駒	柳	K	敵の有家聞分るまでハ橋の下	芦
K	沸釜 <small>ワカ</small> の新にそく水の論	全	E	初相場仕切ハ内の手代きり	子蝶	E	黒ム乳を白薬の忍ひ売り	一
L	蛇陸に井手の蛙は水の底	全	O	とふさひの幕も開る扇舞	白鶴	Q BA	姑風吹も柳の智養子	芦
M	藪口事や鷹の羽風に散る雀	全	V JA	奈良の鹿譲りて何の風情にて	子	I	差合の跡は咄しも恩の時	一
W JA	書文もまたしら露や花の奥	月峯	C	さゝめこと世間しつまる地ハミのる	白	G BA	負相撲味方の山に風立す	飛鳥
X JA	月の座に絵の蟬丸や哥の会	雲母	C	談儀座に出て昔の物語り	子	M	かゆき背もかゝれぬ母の子の添寐	花牛
K	唐焼を留主の茶棚にちる桜	月	D BA	語る間に咄の種子の忘草	白	E	足音に機織姫の棧 <small>せ</small> を止メ	飛
	難題のうたの地取や几	雲	F BA	一富士の夢にこゝろの寄応丸	鼠子	K	葉かくれの花の心や鶉聞	花
U JA	簾越しの花ハ逢ふ夜の天の川	月	F BA	口くせの時鳥さへ他人里	蝶子	U JA	蚊の跡ハ御乳か小袖にかくれんほ	飛
E	水銀の主は何所やら忍ひ売	雲	K	五七文字しらて今宵の和哥の友	鼠	N JA	鶯の門に手を組ム片仁王	花
M	高砂の松も声なき夜の雪	風間	E	御気入の耳は小鳥に入小鷹	蝶	E	計無き酒に乱るゝ酒の友	燕子
C	寐た下女の手足に光る灸の星	桑子	F BA	盗たる花ハ隣の牛の時	鼠	O	金子の位に押されて淀ム口車	井水
F BA	伏勢の矢しり揃る夜半の月	風	D BA	立聞ハ壁に音なし闇の□	蝶	U JA	抜参る子は何の気の神心	燕
C	雪の子の光に皆が牛の時	桑	U JA	附鬘に隠るゝ僧や船便	喬柏	M	朝ほらけ人丸塚の鶉聞	井
C	忍ひ入姫路ヶ城や岩木武者	風	Y JA	積る夜の恥を踏消ス雪の朝	一蝶	H BA	御留場の後を盗鴨の畏	燕
K	片恋の蛇に追れて飛蛙	桑	E	囚と成たる下戸や沖の石	喬	E	金平も一口斗り雷の音	井
F BA	盗人とかめて見れハ花盗人	吐琢	K	毒たくも貞に音なし桜の友	一	E	酒の座に寐たる免は二日酔	若雕
D BA	灰吹の耳に不可也鶉聞	柳子	S RA	其本のミたれの髪を櫛り	喬	M	折られたる枝に音なし桜守り	花牛
E	ほへ掛る犬に詫する束 <small>ツ</small> 飯	吐	V JA	梟の如し座禅の石仏	一	E	千町の堤破るゝ薬酒	喬柏
D BA	裏書も風恐しき花の山	柳	U JA	桶伏ハ鬼か城土の戻り橋	芦洲	G BA	人言も隣の琴にしらへられ	蝶子
C	算用所へ子供鳴出すきりくす	一吐	W JA	梅か香を今宵ハ袖に包ミけり	一笑	N JA	金子の言ふ儀も分別も持なから	芦洲

(23・オ)

(ウ)

(22・オ)

(ウ)

(21・オ)

(25・オ)

(ウ)

(24・オ)

(ウ)

(28・オ)

(ウ)

(27・オ)

(ウ)

(26・オ)

E	才箇の音もたへなぬ大工町	東郷 甫山	全	桜に郭公へ聞へ兼候	全	○城山に鯉のはね居り五月鯉	全
G BA	詠むれハ二見の浦に天照ス	全	(13・オ)	E	哥かるた我も霞の中にあり	全	(ウ)
E	奥の間の座鋪の番ハ寿老人	全		Q BA	卯の花の比ハ何国も田植諷	全	(ウ)
C	ふりつゞくひまなき下駒や傘や	全		E	時鳥くとして呼小鳥	イリキ 立葉	
C	居続にきつねのわかす新屋敷	全		X JA	酒樽の尻も桜に居りかね	全	
E	情出して稼男の貧しらす	全		AS RZ	人橋を桜のかけしよしの川	全	
T JA	極楽の道の遠ふさや定念仏	イリキ 柳虎	(ウ)	O	塩焚て所帯朝間の立煙り	東郷 軒月	(16・オ)
P JA	なにわつの花吸蜂や帆の出入	全		V JA	計る共尽ぬ往来の渡し守リ	全	
O	御の瀬に声添ふ木曾の川流し	全		K	柴焚ケと胸に火はなし姫姑	全	
G BA	吹続く浪花あらしに木の葉舩	東郷 梅月	(14・オ)	G BA	我寺の茶せん尊き鉢扣	ヒハキ 芦洲	(ウ)
M	浮む瀬になかれ寄根の柳つれ	全		M	花咲ハ吉野ハ人の免馬	全	
W JA	鋸屑の山となるらん木挽町	全		P JA	新板か出来て芝居の唐錦	全	
K	旅宿屋は世界の客の料理役	全		C	井の水を汲て社参す氏子共	全	
Y JA	富士の根を拾へと富士の山を見ず	(ママ) イリキ	全	C	摺子木となるや花見の駕籠の足	イリキ 花牛	(17・オ)
Y JA	塩焚の辛子と成りし梅の雨	一笑	(ウ)	O	散ル込ハ花に野風呂の起し炭	全	
M	葛売に問エハ桜見の真盛り	全		Z	石杓つ暮夜の足元響からす	イリキ 一甫	
C	師走より鬧し花の茶屋女	全		D BA	寵愛の蓮花ハ寺の後也	全	
E	旅籠屋の秋よ伊勢路に飛からす	全		K	降積る宿屋に雪の暇なし	同 飛入	(ウ)
W JA	桜の比二見をかけて渡守	ヒハキ 米子	(15・オ)	O	国くの名を逢坂や伊勢の道	同 松風	
D BA	春くれハ袖しかうらの貝拾ひ	全		I	たつ田川錦なりけり御むろ山	全	
C	冠着ぬ我さへ桜に郭公	全		○	足とめて野路に雲雀を聞にけり		
F BA	箱崎の古実や花の姫直シ	一蝶	(20・オ)	E	いやと言娘に無理の言名付	全	
C	たか誰レか木履の音か鶉聞	全		C	無仕付な姫に姑の言聞せ	里月	
AS RZ	腫物に障らぬ姫の花すゝき	全	(20・オ)	C	竹山の雀に鵲の姑声	全	
T JA	抑ク戸の耳障也水鶏汁	鷺声		G BA	相惚やあわぬむかしの物思ひ	全	
E	約束は親には夫よ抜参り	全	(ウ)	D BA	勘当の身に浮露の憐あり	若雕	
K	横道を心ほそさよきつねの火	全		G BA	拾ハれし和尚の白や寺の櫛	吐琢	(19・オ)
M	善悪もいはて聚楽の風柳	全		K	敗軍の将は謀らす九里山	全	
O	忍のべとも御意は怖し身の勤	鳩子		O	制札の文字ハ耿に堺筒	全	
	すれ						
	黙止こそ						

見る事も又聞ことも時鳥	鳥部山止ぬ鳥部屋煙立	親程におやを思ふか小川寺	塩釜や誰レか焚をの煙にて	花に染老の名残の戻り風	斧音の絶ん響や土佐の山	ぬ欤	舟宿に雨の錆付雨鎧	御隠居ハ碁石の濱に涼棚	延竿の川を領地や渡し守	春くれハ蝶の陳場や天王寺	真黒き空晴かぬる五月雨	川の幅綾織姫や渡守	退役の桜は心の己のミ	鰐口の舌も就ぬ堂参り	同じ事ながら宮	参りとハ如何	朝白の花に寢覺の癖ハなし	華ハはな焼場ハやきば人煙	咲桜ハ後になして釣の道	川ハ素顔野山ハ雪の厚化粧
白鶴	子	白	子	白	子	蝶子	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶
客の氣に活込曲輪の女郎花	めし毎の箸にもつるゝ子の行衛	引烈る駕籠の行衛ハ芳野山	晩鐘か涼の時ハ真昼にて	偽を売て利を得る稲荷町	吉野山往來の人の春霞	居統の曲輪ハかねの正一位	幾人に浮身を見せし渡守	真黒ふ立や赤穂の塩煙り	看言ハ我子の耳に灸治也	花咲し吉野ハ茶屋の真盛り	雲助ハ肩て所帯を一荷ひ	川留の宿屋に年の積る雪	桜より茶屋の親父カ大当り	御機嫌の花ハ霞の御抱守	幡厂汚塩焚家の飯煙り	師の恩に冬枯はなし筆の花	麦田からそよ／＼風の涼棚	石山の月にはころふ敷布団	引戻す風と知れ共花の山	小細工に隙盗れてちるさくら
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
客の氣に活込曲輪の女郎花	めし毎の箸にもつるゝ子の行衛	引烈る駕籠の行衛ハ芳野山	晩鐘か涼の時ハ真昼にて	偽を売て利を得る稲荷町	吉野山往來の人の春霞	居統の曲輪ハかねの正一位	幾人に浮身を見せし渡守	真黒ふ立や赤穂の塩煙り	看言ハ我子の耳に灸治也	花咲し吉野ハ茶屋の真盛り	雲助ハ肩て所帯を一荷ひ	川留の宿屋に年の積る雪	桜より茶屋の親父カ大当り	御機嫌の花ハ霞の御抱守	幡厂汚塩焚家の飯煙り	師の恩に冬枯はなし筆の花	麦田からそよ／＼風の涼棚	石山の月にはころふ敷布団	引戻す風と知れ共花の山	小細工に隙盗れてちるさくら
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
客の氣に活込曲輪の女郎花	めし毎の箸にもつるゝ子の行衛	引烈る駕籠の行衛ハ芳野山	晩鐘か涼の時ハ真昼にて	偽を売て利を得る稲荷町	吉野山往來の人の春霞	居統の曲輪ハかねの正一位	幾人に浮身を見せし渡守	真黒ふ立や赤穂の塩煙り	看言ハ我子の耳に灸治也	花咲し吉野ハ茶屋の真盛り	雲助ハ肩て所帯を一荷ひ	川留の宿屋に年の積る雪	桜より茶屋の親父カ大当り	御機嫌の花ハ霞の御抱守	幡厂汚塩焚家の飯煙り	師の恩に冬枯はなし筆の花	麦田からそよ／＼風の涼棚	石山の月にはころふ敷布団	引戻す風と知れ共花の山	小細工に隙盗れてちるさくら
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
客の氣に活込曲輪の女郎花	めし毎の箸にもつるゝ子の行衛	引烈る駕籠の行衛ハ芳野山	晩鐘か涼の時ハ真昼にて	偽を売て利を得る稲荷町	吉野山往來の人の春霞	居統の曲輪ハかねの正一位	幾人に浮身を見せし渡守	真黒ふ立や赤穂の塩煙り	看言ハ我子の耳に灸治也	花咲し吉野ハ茶屋の真盛り	雲助ハ肩て所帯を一荷ひ	川留の宿屋に年の積る雪	桜より茶屋の親父カ大当り	御機嫌の花ハ霞の御抱守	幡厂汚塩焚家の飯煙り	師の恩に冬枯はなし筆の花	麦田からそよ／＼風の涼棚	石山の月にはころふ敷布団	引戻す風と知れ共花の山	小細工に隙盗れてちるさくら
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
客の氣に活込曲輪の女郎花	めし毎の箸にもつるゝ子の行衛	引烈る駕籠の行衛ハ芳野山	晩鐘か涼の時ハ真昼にて	偽を売て利を得る稲荷町	吉野山往來の人の春霞	居統の曲輪ハかねの正一位	幾人に浮身を見せし渡守	真黒ふ立や赤穂の塩煙り	看言ハ我子の耳に灸治也	花咲し吉野ハ茶屋の真盛り	雲助ハ肩て所帯を一荷ひ	川留の宿屋に年の積る雪	桜より茶屋の親父カ大当り	御機嫌の花ハ霞の御抱守	幡厂汚塩焚家の飯煙り	師の恩に冬枯はなし筆の花	麦田からそよ／＼風の涼棚	石山の月にはころふ敷布団	引戻す風と知れ共花の山	小細工に隙盗れてちるさくら
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
客の氣に活込曲輪の女郎花	めし毎の箸にもつるゝ子の行衛	引烈る駕籠の行衛ハ芳野山	晩鐘か涼の時ハ真昼にて	偽を売て利を得る稲荷町	吉野山往來の人の春霞	居統の曲輪ハかねの正一位	幾人に浮身を見せし渡守	真黒ふ立や赤穂の塩煙り	看言ハ我子の耳に灸治也	花咲し吉野ハ茶屋の真盛り	雲助ハ肩て所帯を一荷ひ	川留の宿屋に年の積る雪	桜より茶屋の親父カ大当り	御機嫌の花ハ霞の御抱守	幡厂汚塩焚家の飯煙り	師の恩に冬枯はなし筆の花	麦田からそよ／＼風の涼棚	石山の月にはころふ敷布団	引戻す風と知れ共花の山	小細工に隙盗れてちるさくら
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
客の氣に活込曲輪の女郎花	めし毎の箸にもつるゝ子の行衛	引烈る駕籠の行衛ハ芳野山	晩鐘か涼の時ハ真昼にて	偽を売て利を得る稲荷町	吉野山往來の人の春霞	居統の曲輪ハかねの正一位	幾人に浮身を見せし渡守	真黒ふ立や赤穂の塩煙り	看言ハ我子の耳に灸治也	花咲し吉野ハ茶屋の真盛り	雲助ハ肩て所帯を一荷ひ	川留の宿屋に年の積る雪	桜より茶屋の親父カ大当り	御機嫌の花ハ霞の御抱守	幡厂汚塩焚家の飯煙り	師の恩に冬枯はなし筆の花	麦田からそよ／＼風の涼棚	石山の月にはころふ敷布団	引戻す風と知れ共花の山	小細工に隙盗れてちるさくら
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
客の氣に活込曲輪の女郎花	めし毎の箸にもつるゝ子の行衛	引烈る駕籠の行衛ハ芳野山	晩鐘か涼の時ハ真昼にて	偽を売て利を得る																

〔丑年亀十点雑俳集〕

落花風月叩詩□

明け暮に心の糧の文林

右春 東郷

蔵書

東郷
蔵書

きのふも
けふも
今日も
昨日も

D BA 御利生の涌て清水の開帳記

C 蜂ならハ浪花ハ桶よ帆の出入

E 早乙女やあかぬ男と相仕事

F BA 一寸の影も勤の一とむかし

イリキ
鳩子

全
(1・オ)

塩木屋の煙立田のとりべ山 (ママ) ヒハキ
吐琢

白木屋欵塩木屋とハ愚案承

知らず残心

G BA 唐崎の竿のしづくや渡守 同 全

D BA 世を送て水ていきする御水守リ 若雕 全

H BA 降雨に紙漉ともか糊倒 全

空耳寄有れども (ママ) (ウ)

F BA 濡て居る案山と見へし爪の番 全

妻木割の難波に響く土佐の山 東郷 鷺声 全

E 乳母か餅何ッ迄命の水くさし 全

C 秋くれハ人のたへ間もあらし山 全

あらし山ハ桜の名所秋に人の絶間

もあらしの三味覚束なし春来れハと

有らはいかゝ (ウ)

I 四条川流を汲や夕涼 同 全

P JA 蓑笠を鎧ふて出る田植時 全

Q BA 旅籠屋の風呂加減見る留女 同 全

K 水売に聞ハよし野て水は切れ 東郷 一蝶 全

G BA 菅薦の名を編かゝる哥の集 宇風 (ウ)

U JA 山々を分て隙なし花の比 全

V JA 人丸の落葉を爰に柿の本 全

D BA 春の田を人にまかせて花に酔 全

L 欲すれと海士はしけても浪の上 同 全

F BA 隙の有程ハひまなき鶉聞 同 全

F BA 月花のおいつる懸て旅草鞋 同 全

Z 城の喉潤す淀の水車 同 全

M 梅の木四季に薫るや和中散 同 全

H BA 大下馬は諸国のちりの簪き溜 同 全

N JA 勘当の詫に鳴来ル郭公 同 全

K 談儀所は掛樋の御手の定念仏 同 全

O 臼の音耳につまつく姥か餅 同 全

P JA 籠拔のゆく衛ハい勢の宮雀 同 全

O 峠より見渡す魚みの目か長 同 全

Q BA 人橋のかゝるほとあれよし野茶屋 同 全

C 下タを見て渡迄浮世の他人里 同 全

S RA 白足袋の花や目黒の人通り 同 全

K 一人子の旅ハあやなし親心 同 全

M 蓑笠や蛍の出来し五月雨 同 全

L みなし子の乳房尋て時鳥 同 全

D BA 卯の花に通ふ寝耳の郭公 同 全

K 国々の鍵ハ御殿の長屋まで 同 全

(3・オ)

(ウ)

(4・オ)

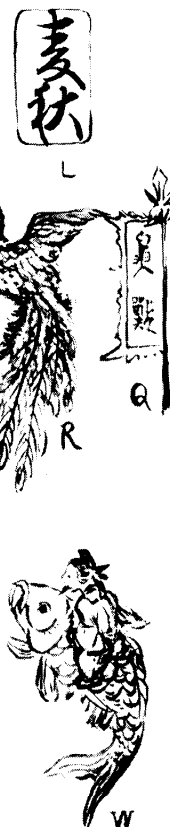
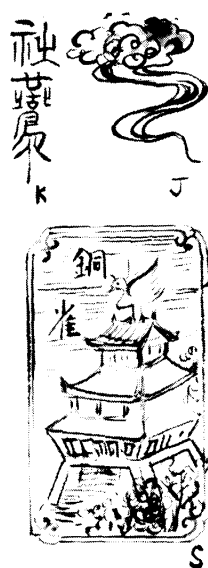
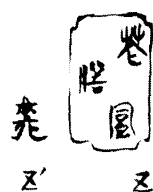
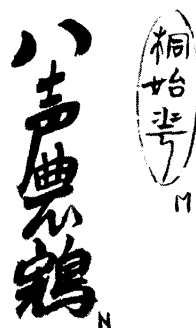
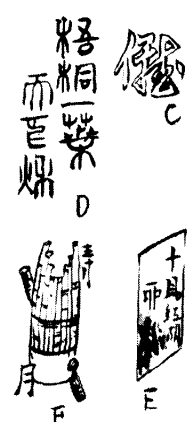
(ウ)

(5・オ)

本文は、原文を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便をはかるため左の要領に従った。

- (1) 文字はおおむね現行通用のものに改めた。しかし当時慣用の嶋・貞・艸・邈・广・汚・哥・迄・姫・船・软など、わずかながら異体字・略字体を用いたものもある。
- (2) 清濁・仮名遣いは原本通りである。
- (3) あきらかに誤りと思われる部分には（ママ）、宛字には（ ）内に正しい文字を記し脇に付した。
- (4) ミセケチ訂正は、ミセケチを左に、訂正文字を右に統一して記した。
- (5) 丁付は（1オ）・（ウ）のように簡略にした。
- (6) 本文が擦れて判読困難な箇所は□とした。
- (7) 鉤点・印点については、下に示すように模写図を作り、ABC……の記号で句の上に記した。鉤点Aは墨、他の印点はすべて朱である。

△鉤点・印点△



付墨が施されたものである。集中「巻頭」の朱書によると、Aは「客の氣に活込曲輪の女郎花 一笑」、Bは「梅か香を今宵ハ袖に包ミけり 一笑」、Cは「道の辺に焚螢の火 一笑」が、それぞれ巻頭を得たことが知られる。そして「点揚」によると、入来の一笑了が総計四五〇点を得て第一位であって、本雜俳集の清書の巻は、螢子・一甫から一笑に贈られたのであった。

なお、本集の中で注目されるのは、樋脇住の作者と入来住の作者とを番えて優劣を判じていることで、樋脇を西とし月峯・風間・吐琢・子蝶・胤子・喬柏・芦洲・飛鳥・燕子・若雕・喬柏・芦洲の十二人、入来を東として雲母・桑子・柳子・白鶴・蝶子・一蝶・一笑・花牛・井水・花牛・蝶子・一蝶の十二人と番えている。その結果は、西側三五番、東側五一番が勝、差し引きで東側十六番の勝となっている。これを点で示すと、西側が計四九九五点、東側が計五七八五点を得、差し引きで東側七九〇点の勝となっている。

さて、本雜俳集の成立年時については、紹介者の本田氏は「おそらく安永（一七七二）以後の句集であろう」としておられる。しかし、今少し時代がしほれないであろうか。本雜俳集の入集者のうち、樋脇の芦洲・喬柏・飛鳥は、先に紹介した雜俳集『十九夜の巻』に入集している。また、東郷の宇風は『続船親父』に、同じく鷺声・梅月は『船親父』にそれぞれ入集している。こうした点から見て、本集は文化・文政頃の成立ではなからうか。（文化二年・同十四年、文政十二年がそれぞれ丑年

に当たる）

因みに本田親虎氏の教示によると、所蔵者の東郷家は、中世東郷渋谷氏の二男家であり、十五世紀末に入来院家に仕え、特に近世には代々室老家として郷政に重きをなして来た家柄であった。そして文政時代に室老をつとめたのは東郷実辰（一七七三生）なので、本雜俳集はこの実辰時代のものでなからうか、ということであった。

筆を擱くにあたり、本集の翻刻を快くお許し下された上、種々御示教をたまわった本田親虎氏に厚く御礼を申し上げます（大内）。

雜俳集『丑年亀十点雜俳集』

——南九州の国文学関係資料（十三）——

解 説

○『丑年亀十点雜俳集』

横本・写一冊（入来町東郷家蔵）

本集は、早く『入来町誌』に本田親虎氏によって紹介されているものである。例によって初めに書誌的な説明を加えると、袋綴じ横本一冊。たて一六・七センチ、よこ二三・七センチ。五十七丁。一丁片面四句宛書かれている。共紙表紙で、梅花を描いて「落花風に叩詩□」「明け春に心の糧の文林」と後人の筆で墨書し、「東郷蔵書」の印を押してある。

内容は雜俳集で、

Aきのふもけふも今日も昨日も

B黙止こそすれく

C跡先に

橋 口 晋 作
福 井 迪 子
大 内 初 夫

の三つの題による付句を集めたもので、Aの前句付の付句一三八句、Bの付句一三八句、Cの冠付の付句一三八句をそれぞれ収録している。なお、現在Aの付句末尾に「足とめて野路に雲雀を聞にけり」「城山に鯉のはね居り五月鯉」の二句が記されているが、本田氏によると、東郷正豊氏が大正時代に書き入れたものとのことで、異筆であることが明らかであるので前記の数に加えなかった。

本集の作者は、

○東郷——鷺声・宇風・甫山・梅月・軒月

○入来——鳩子・里月・一蝶・雲母・桑子・柳子・白鶴・蝶子・一笑・花牛・井水・柳風・雲歩・立葉・一甫・飛入・松風

○樋脇——吐啄・若雕・月峯・風間・子蝶・胤子・喬柏・芦洲・飛鳥・燕子・端月・米子

等、三十四人である。卷末の記載によると、清書堂は蛸子・一甫とあるので、この兩名によって本雜俳集は企てられ、宗匠亀十によって引点・